

5. 吉田第2号窯発掘調査報告書

(表紙)

愛知県大府市
吉田第二号窯発掘調査報告書

昭和50年
大府市教育委員会

序 文

日本人の心のふるさとに触れようとする機運が澎湃として高まりつつある時、文化を尊重し郷土を愛する声は一層たかまってきました。これも潤いある生活を求める市民の本来の心情のあらわれでありましょう。

われわれの祖先の手づくりになる貴重な文化遺産を通して祖先の生活の姿に触れ、長い時間にわたって絶えることなく流れてきた私たちの“祖先の心”をしのびたいものです。

名古屋市の隣接地として発展してきた大府市は、市内の各地で開発が行われ自然の変貌も激しいものが見受けられます。

したがって貴重な文化遺産を保護する対策を講ずることは、文化の継承をはかろうとするわれわれの責務であると考えます。

幸いにして、名古屋大学の檜崎彰一先生に依頼して市内吉田町の古窯址を調査することができました。この結果、大府の地で熱田神宮や京都の安楽寿院の瓦を古代に焼成したことが確認され興味深いものをおぼえました。“祖先の心”に触れられた方々が核となって文化財愛護思想の輪が大きくひろがり、よりよい社会を築いていくエネルギーとなることができるならばこのうえもないしあわせであります。

本書は、その調査報告書であります但各方面での活用を切望いたします。

終わりに、本報告書を御執筆戴いた愛知県文化財課柴垣勇夫氏をはじめ、調査に協力された方々に厚く感謝の意を表します。

昭和50年3月

大府市教育委員会

教育長 水野明治

目次

1 遺跡の位置
2 調査の経過
3 古窯の構造
4 出土遺物
5 結語

挿図目次

図版目次

第1図 遺跡位置図	図版第1 遺跡(1)
第2図 古窯付近地形図	図版第2 遺跡(2)
第3図 窯体構造実測図	図版第3 窯体構造(1)
第4図 出土遺物実測図(一) 椀類	図版第4 窯体構造(2)
第5図 出土遺物実測図(二) 特殊品類	図版第5 出土遺物(1) 椀・皿類
第6図 出土遺物実測図(三) 軒丸瓦、軒平瓦	図版第6 出土遺物(2) 軒丸瓦類
第7図 出土遺物実測図(四) 各種瓦類	図版第7 出土遺物(3) 軒平瓦類その他
第8図 出土遺物実測図(五) 各種瓦類	図版第8 出土遺物(4) 平瓦、丸瓦および軒平瓦
		図版第9 出土遺物(5) 瓦、皿類および社山古窯出土同范品

例言

本書は、昭和44年7月に大府町教育委員会が実施した、大府市吉田町惣左衛門池北10の1(当時知多郡大府町)所在吉田2号窯の発掘調査報告書である。

調査は名古屋大学文学部考古学研究室・楢崎彰一助教授を担当者として、同研究室学生諸氏の参加のもと、遂行されたが、このほか町文化財保護委員、森岡公民館職員等各位の絶大なご尽力があった。

本書の執筆は、愛知県教育委員会文化財課柴垣勇夫が担当し、楢崎彰一がこれを校閲した。

なお、遺物整理は名古屋大学考古学研究室学生がこれにあたった。

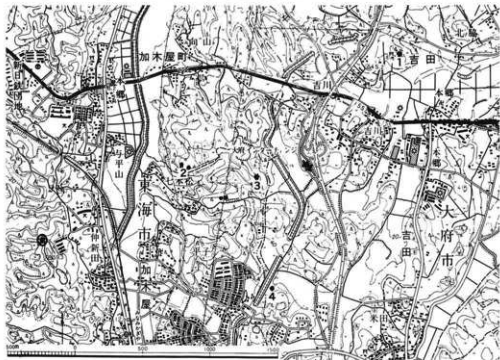
昭和43年に実施した吉田1号窯と同様、本窯もまた瓦生産窯で、ここに市内における当時の瓦生産の全貌が明らかにされることになったわけである。なお、吉田1号窯は、すでに昭和44年3月「吉田第一号窯発掘調査報告書」として刊行している。

1 遺跡の位置

知多半島は、地質的に、第三紀鮮新統の常滑層群からなる低丘陵地列なつて形成されており、砂、シルトおよび亜炭で構成される鬼崎層（西浦層）と、砂・礫およびシルトで構成される三和層（阿久比層）がみられる。高位丘陵には部分的に第四紀更新統の砂・礫およびシルトからなる武豊層がある。これらが陶土として利用されるわけであるが、知多半島全域には1,000基の中世陶器生産窯が存在したといわれる。

その分布は常滑市を中心にこれをとりにくく知多市、阿久比町、東浦町、半田市に群在し、北端は、この吉田古窯の北方4kmにある東海市奥山池古窯址群から、南端は、南知多町大井釜山古窯址群にわたる。

知多丘陵は、南北に走る2つの断層で北部丘陵地を3分するが、東側の断層（大高・大府を結ぶライン）以東は、尾張丘陵に連続し、狭義の知多丘陵は大高・大府ラインと西側の断層（名和・加木屋ライン）間の大高から半田市乙川に至る東丘陵と、名和・加木屋ライン以西の東海市名和から半島先端の師崎に至る西丘陵とにわかれる。本吉田古窯は、このうち東丘陵の中央やや北寄りに位置し、加木屋近くの、北西から東へのびる標高40～45mの支丘の



第1図 遺跡位置図

(×印吉田古窯、◎印社山古窯、1、野々宮古窯、2、定納1号窯、3、権現山古窯、4、論田古窯)

南斜面に立地する。標高は30mほどで、全面の支谷は堰止められ近世の溜め池となっている。

昭和43年調査の吉田1号窯と本2号窯との位置関係は、第2図にみる如くであるが、1号窯のほは東23mに位置し、燃焼室の床面の高低差は1号窯に比して2号窯が約50cm高い。旧地形は、現等高線よりやや北東方向へふれる傾斜をもっていたものであろう。

本窯の周辺には、近年灰層が発見された末期灰軸陶器を焼成した大府市野々宮古窯、名和・加木屋の断層線の西丘陵北斜面に立地する瓦生産を主体とした社山古窯、本窯と同様初期山茶碗窯で社山古窯と同系統の鬼瓦が採集されている定納1号窯、おなじく社山と同一意匠をもつ瓦とやや時代の下がる山茶碗を伴出した権現山古窯、また本窯の南約1kmに社山と同一意匠の瓦を出土した論田古窯(注7)があり、平安末期から鎌倉中葉までの瓦陶兼業窯が集中している。

注1 松沢勲ほか「知多半島北部地質図」愛知県教育委員会 昭和37年

注2 杉崎章ほか「知多半島古窯址群の分布と群別細分」(「大知山、旭大池古窯址」所収)東海古文化研究会 昭和45年

注3 杉崎章「常滑窯業の歴史」(「常滑窯業誌」所収)常滑市 昭和49年

注4 杉崎章ほか「社山古窯」(「横須賀の遺跡」所収)知多郡横須賀町 昭和31年

注5 杉崎章、久永春男ほか「権現山古窯址」横須賀中学校 昭和40年

注6 注5と同じ

注7 注4および注5と同じ

2 調査の経過

昭和43年8月大府町教育委員会(現大府市)が実施した吉田1号窯の調査は、東海市社山古窯と同范の瓦を焼成している事実と、京都鳥羽離宮安楽寺院への供給瓦の存在を明らかにしたが、このことは、この古窯が古代末期から中世社会への転換期の窯業生産に重要な意義をもつことを物語っていた。

しかし1号窯における窯構造が、焼成室上部および焚き口部を欠いていたこと、出土遺物において焼成製品がごく少量だったことから、必ずしも古窯とその製品の全貌を明らかにすることはできなかった。一方、昭和43年当時確認された第2号窯の灰層には、1号窯にはみられない別の軒丸瓦や、鬼瓦のほか同時焼成したと思われる山茶碗、小皿の類がみられ、各種の製品が期待できること、古窯の残存状況の良好なことが知られた。

そこで、引続いて第2号窯の発掘調査を実施することが、この時期の窯業生産の実態をよ

り明らかにすることができると判断され、大府町教育委員会は、名古屋大学文学部考古学研究室に依頼し、昭和44年7月21日～28日にかけて発掘調査にとりかかったのである。

これまで、埋蔵文化財の存在が稀少なこの地域に、吉田1号窯の発掘調査は市域における文化財への関心を引きおこし、吉田2号窯の調査が、更に住民の文化財に対する認識を高めることとなり、地元の積極的な応援のもとに調査は遂行された。さらにこの時期に、NHK教育テレビ「みんなの科学」取材班が、遺跡に対する一般の関心を高めることと、考古学における自然科学の援用、発掘調査技術の方法等をわかりやすく報道するため、発掘期間中滞在し取材したことも、同時に住民の関心に大きな影響をもたらした。

調査はまず灰層の堆積状況の確認から始め、地形測量のうえ灰層部分の発掘調査に取りかかった。灰層中からは山茶碗、小皿以外に、平安末期の広口壺片および長頸瓶の把手片、特殊小型台付杯などが発掘され、製品の多岐にわたることが判明した。さらに窯体部分の調査によって焼成室内における焼台の残存状況が確認され、瓦陶兼窯において、いわゆる馬爪形焼台が窯道具として主流をなしていること、焚き口部分が焼成室の焼きしまりに対して脆弱なこと、窯前庭部を地形整形したうえで、築窯していることなどの事実が判明した。焼成室上部は1号窯同様、畑地の開墾によって削平されていたけれども、焼成室の約3分の2が残存していて、その大きさを推定することができ、煙道部をのぞいて、ほぼ古窯全体が把握できる成果をもたらしたのである。

3 古窯の構造

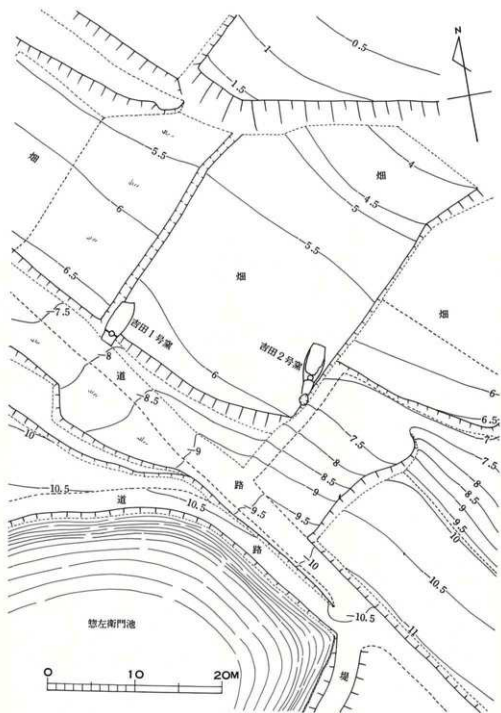
調査によって明らかになった吉田2号窯の構造は、通有の竈窯と呼ばれる山茶碗窯で、分焰柱をもつ構造のものであった。

その規模、特徴等は以下のものである。

● 燃焼室および焚き口

分焰柱によって焼成室と燃焼室が区分され、燃焼室は巾1.3m～1.7m、長1.6mを測る。燃焼室の側壁は壁面の剥離がひどいが、分焰柱寄りに壁面の焼けしまった状態が2層確認され、二次焼成壁面の存在が首肯された。焚き口部分は、巾が狭まり1.2mをはかるが、特別な施設はない。窯前施設として長径1.3m、短径0.9m、深さ0.3mの楕円形ピットがあり、灰および山茶碗の破砕片が出土している。

床面は赤褐色に焼けた地山が確認されたが、わずかに分焰柱にむけて下降する様子がかがわれ、計測では2～3°の傾斜であった。粘土をはりつけて床面を作るのは、焼成室から分焰柱周囲のみで、燃焼室にはそれがみあたらない。燃焼室内では、山茶碗・小皿のほか生焼



第2圖 吉田古黨村近地形圖

けの軒先瓦が出土している。

分焰柱は不整形で一辺60cm前後のものである。天井部まで存在していて、燃焼室側からみた通焰孔の高さは、左で65～70cm、右で60～65cmを測る。分焰柱全面に粘土をはりつけていて、部分的に地山の赤褐色に焼けた状態がみられ築窯の際、柱を残して分焰柱としたものであった。

● 焼成室

焼成室の残存長は、4.5mをはかり、平面図からの推定で、6mほどの規模と考えられ、1号窯に比してやや大きく、巾は分焰柱から1.7mのところまで最大2.55m、残存最上部で1.95mである。壁面は壁の剥落部分の様相から二度粘土をはりつけられていることが判る。特に中央部分の壁面には10～15cmほどの粘土塊のはりつけがみられる。床面は分焰柱中央から90cmの間は、ほぼ水平に移行し、その後30cmの間が約7°の傾斜でのぼり、以後傾斜を増して斜面下位で24°、中位で33°、上位で28°の傾斜をもっていた。

窯面には、馬爪形焼台が壁面沿いと上位に原位置を保って検出された。大部分が山茶碗の高台部が乗るように円形の溝の凹みがある焼台であるが、中に凹みのない焼台が10個ほどみられた。おそらく瓦等の焼成に用いたものと思われる。

床面は、実測後、横断トレンチを入れ、切ったところ、地山の上に4cmほどのスサ入りの有機質土層があって、その上に床面粘土を2cmほどの厚さで貼っていることが判った。排湿を考えたものであろう。なお焼成室内からの出土遺物は山茶碗片のみである。

焼成室下部に1mほどの平坦面があって、30°以上の傾斜をもつ全長7～8mの小規模な窯構造は、山茶碗窯として通有のものであるが、東浦町八巻古窯、阿久比町陶ヶ峯2号窯、東海市権現山古窯などと同様、焚き口前庭部にピットを配置している点、知多古窯址群のうち、平安末期から鎌倉前期にかけての特徴的な山茶碗の1つといえよう。

注1 橋崎彰一ほか「愛知県知多古窯址群」愛知県教育委員会 昭和37年

注2 橋崎彰一「愛知県知多古窯址群」愛知県教育委員会 昭和36年

注3 杉崎章ほか「権現山古窯址」横須賀中学校 昭和40年

4 出土遺物

本窯の灰層および燃焼室を中心に出土した遺物は次の種類、数量である。

山茶碗	285 (底部片)	小皿	61 (底部片)
広口壺	3 (口縁片)	短頸壺	1 (胴部片)
長頸取把手	4 (小片)	特殊小型台付杯	1
軒丸瓦	20 (瓦当文の明瞭なもの)	軒平瓦	10 (瓦当文部分)
丸瓦	10 (玉縁部分)	鬼瓦	3 (破片)
他に平瓦、各種瓦片多数			

これら遺物の特徴は以下のとおりである。

なお、吉田第1号窯報告書掲載の2号窯灰層出土のものも今報告に含めた。

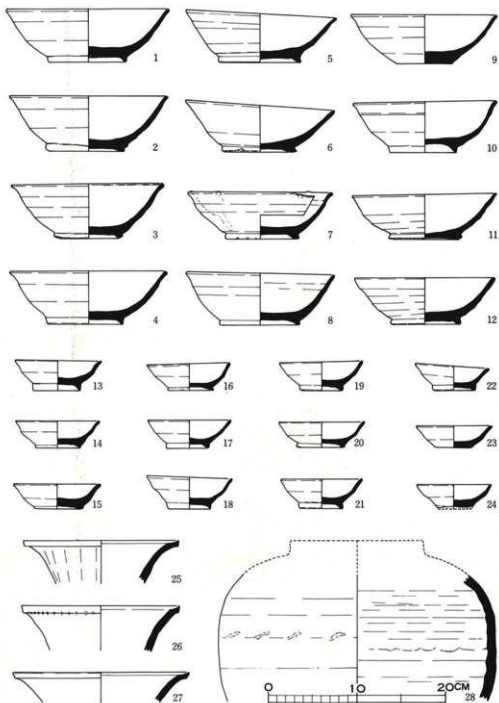
1 碗、壺類

1 碗類 (第4図1~12)

径18cm前後、高6.2cm~6.5cm、底径9cm~8.5cmの大型のもの、径17cm前後、高6cm~5.5cm、底径8~8.5cmの中型のもの、径16cm前後、高5.0cm~5.8cm、底径8cmのものと3種がみられるが、高台および内面の作りから大略2種に分けられる。すなわち(Ⅰ)口径18cmの大型のものは(1~4)深い碗形で、胴部が内反り気味である。口縁はやや外反するが、中に外反させるため強くロクロを引いたことによって器外面に稜をなす器形もみうけられる。高台は、逆三角形の付け高台で、高く、ひずみが少ない。焼きはややあまいものが多い。(Ⅱ)口径16~17cmの大きさのもの(5~12)は、浅鉢形で胴部が直線的に口縁に向かい、外面にロクロの引きの線条が明瞭に残っている。大半の内面に自然釉がみられる。高台は付け高台ながら、鈍重な三角高台で、大型のものほど高くない。なお、靱痕は、双方ともにみられるが、概して(Ⅱ)のものには、高台全面にみられる。

高台のない第4図9は糸切り底のままで、高台付着痕もないが、碗の器形は(Ⅰ)、(Ⅱ)の中間型のような感を呈する。

第4図7は、輪花碗のなごりを示し、口縁4か所を小さく外面からおしつけている。釉が3か所にみられ、灰釉をかけているかにみえるが確証はない。



第4图 出土遺物実測図(一)碗、皿、麥類

2 小皿類 (第4図13~24)

(I) 口径10cm前後、高3~3.5cm、底径5~5.5cmの大型のもの(13~21)と、(II) 口径8cm前後、高2.5~3cm、底径4.5~5cmの小型のもの二種がある。1点を除きすべて高台をつけている。器形的には類似し、胴部が稜をなす丁寧な作りのもので、高台に靫痕が認められる。第4図23は糸

出土位置	碗		皿	
	I	II	I	II
室内	10	23	0	0
焼室	27	32	0	0
灰層	80	113	27	34
計	285		61	

切り底のままで、高台の貼付け痕跡はないものの、底部粘土端をもりあげ高台に似せている。

(I)、(II)とも内面に重ね焼きの痕跡部分まで自然釉がかかっている。

碗、皿にみられる(I)、(II)の器形はセットとして時間的な差を示すようであるが、他の製品にその差を見出すことができないため、速断はさけよう。両者の出土量は右表のようであった。

3 広口壺 (第4図25~27)

口縁部の破片が3点採集されたのみである。

口径17.5cm~20cmの広口壺で、外面に自然釉が顕著である。うち1点(第4図26)には、口縁端部に細い刻み目を付しているのがみられる。胎土は次の短頸壺片とともに灰白色の緻密なものである。

4 短頸壺 (第4図28)

胴肩部の破片で、復元胴径31cmを測る。輪積み痕跡が一段みられるが、器面をよくクロク整形している。胴肩部に自然釉がかかり光沢をはなっている。

5 長頸瓶把手 (第5図2.3.4)

長頸瓶の口縁部から胴肩位に付したと思われる把手が4片採集されている。うち3点を図化したのが、粘土紐をよりあわせて把手としたもので、自然釉がよくかかっている。

粘土紐は3種あって、2条のものと4条のもの2種とがあり、4条のものうち、第5図3は、2条ずつよりあわせてのち、貼りあわせてのもので、第5図4は4条を一緒によりあわせている。図示していない他の1点は、2条よりあわせの小片である。

太さは1.2cm~1.8cm。

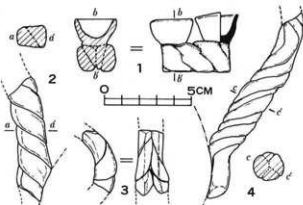
この類例には、瀬戸市広久手F窯出土の灰釉縄手付長頸壺とよばれるものの把手(やや大型)、名古屋市東山61号窯出土の把手付長頸瓶の把手がある。広久手F窯は灰釉焼成窯で、本窯より一時期古いが、同巧の把手で、ラッパ状に開く口縁をもち、頸部と胴部の境に段を有する長頸瓶に付く。東山61号窯のものは2条よりあわせの把手で、同様ラッパ状口縁とくびれ部に段を有する長頸瓶に付く。なお、東山61号窯のものは把手の付く反対側の胴肩部に注

口を有する。

6 特殊小型台付杯 (第5図1)

粘土紐を2条ずつよりあわせ、これをはりあわせた長4cm、高1.6cmの台部に口径2.5cm、高1.5cmの小杯2ヶをのせたもので、完形品である。小杯は東浦町八巻古窯(註3)に出土しているし、同大の杯を高杯の上に2ヶ付けたものが梶廻間古窯(註4)から出土している。また、小杯が4cmとやや大きいが同様器台の上に2ヶ付けたいわゆる子持器台が渥美半島の皿山2号窯(註5)、東大寺瓦窯南窯から出土している。しかし本例は特殊な粘土紐を器台としている点で類例のないものであって器面片側に自然軸がうすくかかった焼きしまりのいいものである。

子持器台は、少数例の出土しかない点で流通品ではなく窯屋の祭祀用品として製作したという説もあるが、関連古窯から少数例ながら仏器類等を伴出している点と、本例のように長頸瓶把手と同巧の台部を作っている点から考えて、把手付長頸瓶とともに仏教用具としての特注品ではなかったかと考える。



第5図 出土遺物実測図(二) 特殊小型台付杯および把手

II 瓦 類

瓦は、軒丸、軒平、鬼、丸、平の各瓦の出土をみたが、瓦当文様は種類は少なく、次員の

種 類	特 徴	吉田2号窯出土数	吉田1号窯出土数	社山古窯
三巴文軒丸瓦	I 右まわり三巴文、珠文24	5	1	◎III
	II 左まわり三巴文、珠文26	8		○V
	III 左まわり三巴文、珠文24	7		◎V
唐草文軒平瓦	I 唐草が鈍重で、右側の派生文9条	2	3	◎I
	II 唐草が流麗で、右側の派生文8条	3	6	◎I
鬼 瓦	I 雄瓦、角、牙をもつ	3		◎I

※ 社山出土欄は、◎印が吉田古窯と同范を示し、○印は范が確認できないが類似のもの、ローマ数字は「社山古窯」(「横須賀の遺跡」所収)の杉崎氏分類を示す。

ような種類であった。

本2号窯出土のものは、生焼けが多いが、軒平瓦に軸のかかっているものもみられる(第7図1・2)。しかし、吉田1号窯出土瓦においては軸のかかかっていないものが大半で、本窯のものもおそらく自然軸と考えられる。

1 三巴文軒丸瓦 (第6図)

尾の長い三巴文で、焼成室および灰層から出土し、大半が生焼けである。瓦当部分に素縁がまほどついた形の出土が多く、丸瓦部分がすべてはずれている。

今、断面から製作工程を推定すると、まず瓦当文様の木型に粘土をおしつけ、素縁の外周縁を同粘土で作りに出して瓦当部分を作り、次に丸瓦さしこみ部分をへらで削りとってから、別に布使用の模骨で作った玉縁付丸瓦をさしこみ継ぎ目に粘土を充填しながら整形するという工程をとっている。

さて、前表のように軒丸瓦の文様には次の3種がある。I、右まわりの三巴文の内区に珠文24ヶを配した外区がくるもの(第6図5~8)には、径16cm前後(生焼けのためやや大きい)の大きさで、巴頭の一つから直線的に珠文の型による低い隆起帯がある。この特徴は吉田1号窯出土の完形軒丸瓦にもあり、同じ范による製作を示す。II、左まわり三巴文に26ヶの珠文を配したもの(第6図1~3)は、生焼けで径15.5cmをはかる。現在のところ、型の特異な点はみられない。量としてはもっとも多いものと思われる。III、左まわり三巴文に24ヶの珠文を配した(第6図4、第8図5)ものは、径が15~16cm前後と推定される。この種のもの7例あるが、うち1例(第8図5)に三巴文の巴頭から直線的に珠文に向かう、わずかな隆起帯があり、型に掘りこまれている特徴とみられる。他のものは、生焼けで表面の剥落がひどくこの隆起帯が確認できないが、同型とみられるものは5例ある。第6図4は、巴文が細く別の型があるようにも思われるが、型づれがみられることと、型取り後表面を整形していることをあわせて、この種と同一の型と考えている。

以上の3種のうち、I、IIIは、ともに社山古窯出土三巴文軒丸瓦と同范である(第8図参照)。IIについては、特徴が現在見出だせないで、断定できないが、同じ社山と同范の可能性が高い。

2 唐草文軒平瓦 (第6図、第7図)

古代の唐草文を模して作成されているもので、三反転の均整のようであるが、細部に差があって全くの均整ではない。文様細部もちがって2種類ある。

今、断面から製作工程を類推すれば、まず布を使用した模骨で作成した平瓦の先端をおりまげ、瓦当文の木型におしつけ、次に頸部に断面三角の粘土帯をあて、周囲をへら整形する。これで完結する場合と、更に断面三角の粘土帯の上へもう一枚の平瓦を貼りつけ、二枚の厚

みとし周囲をへらで整形しているものと二種ある。これは、特に文様変化と関係ないようである。さて文様のちがいは次のとおりである。

I. は唐草文の先端が厚く反りの短かいもの(第6図9、第7図1)で、中心飾のハート形の下にくる蔓がハート形に接続している。長辺27cm短辺5.5cmの大きさで、第7図1は、平瓦の破片末端部で厚さ3cmを測る粘土2枚重ねのものである。

II. は、前者に比べ反りの長く流れるもの(第6図10、第8図2)で、中央ハート形下部に右から来る蔓が切り離されている。前者と同大で、京都安楽寿院出土例が同范である。
(註9)

I、IIとも社山古窯軒平瓦と同范である。

なお、第7図2の平瓦は凹面に布目を有す軒平瓦で、中央をのぞいて自然釉がよくかかっている。瓦当部分までの復元長は36cm、瓦末端巾は21cm厚さ2.5~1.8cmを測る一枚造りのものである。

3 鬼瓦 (第8図7、8)

灰層より3片出土していて、1点は外区珠文部片の生焼け、1点は鼻頭部分、他の1点はよく焼けた右下半部分の大型片であって後2者を第8図に掲載した。外区珠文のうち、右下から2番目が左に寄っているという特徴が、社山古窯出土鬼瓦と同范とする理由である(第8図参照)。

社山には同型の他の部分の出土があり、それをもとに復元すると、この鬼瓦は底巾32cm高40cmの大型の角・牙をもつ雄瓦となる。棟のはまる部分は、糸切りの痕跡が認められる。

4 丸瓦 (第7図3、4)

玉縁のつくもので、凹面に布目痕、凸面に糸目痕がみられる。径16cm前後を測り、厚みに2.4cmと1.8cmのものがある。おそらく2.4cmの厚手のものが瓦当のつく軒丸瓦にされていたものと思われる。灰層、燃焼室から10数例出土している。

5 平瓦 (第7図5)

今回の出土例は灰層から破片が10数例と少ない。吉田1号窯出土例と同様の作りで、模骨痕が凹面に認められ、凸面に糸目状の圧痕がみられる。大きさは長28cm、巾20~22cm前後と推定される。巾広の部分をへらで斜めに切りおとしている。

III 窯 道 具

1 分 焰 棒

灰層から円柱状の粘土塊が2点出土した。表面のどっぶりした釉の付着状況から分焰棒と考えられるもので、大きさは高23cmと17cm、厚みは6～10cmで断面楕円を呈する。表面は凹凸がはげしい。

2 焼 台

2種類あって、いわゆる馬爪形焼台と円盤形焼台とが出土している。ともに表面に山茶碗を乗せる円形の溝跡がある。なお、平滑な円盤形焼台も出土している。大きさは径15～20cmで、高さは8～12cm前後が多い。

以上が本窯出土遺物の概要で、吉田1号窯が碗、瓦のみに対し、少数ながら各種の製品を焼成していることがわかる。

注1 宮石宗弘ほか「広久手F谷古窯」「瀬戸市の古窯」第1集 昭和42年

注2 橋崎彰一「東山古窯址群」「愛知県知多古窯址群」 昭和36年

注3 橋崎彰一ほか「八巻古窯址群」「愛知県知多古窯址群」 昭和37年

注4 芳賀陽「祝懸間古窯址」八幡町史資料第6集所収 昭和38年

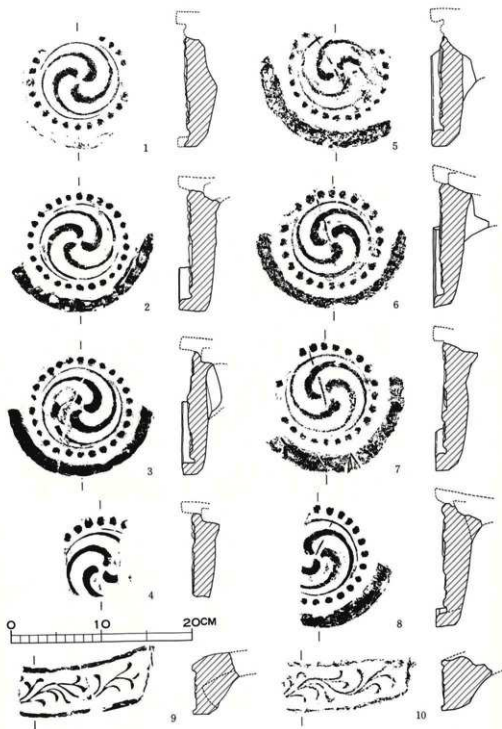
注5 杉崎章ほか「皿山古窯址群」「豊川用水路関係遺跡調査報告」愛知県教育委員会 昭和40年

注6 久永春男ほか「伊良湖東大寺瓦窯群」「渥美半島埋蔵文化財調査報告」愛知県教育委員会昭和42年

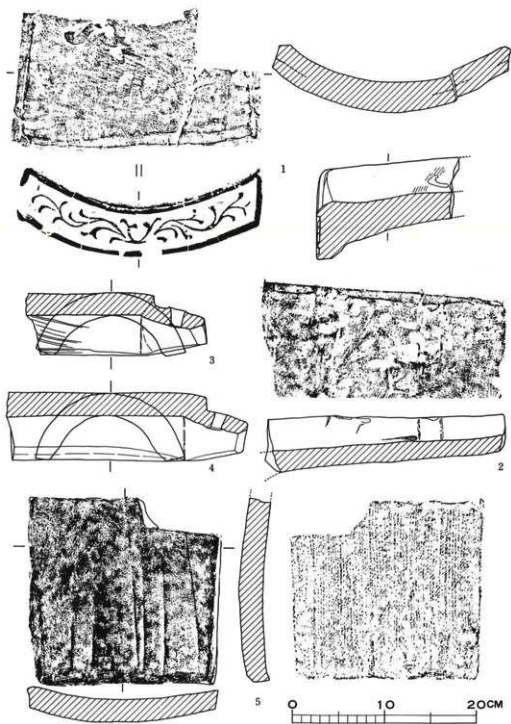
注7 杉崎章「常滑窯業の歴史」「常滑窯業誌」所収 常滑市 昭和49年

注8 拙著「吉田第一号窯発掘調査報告書」大府町教育委員会 昭和44年

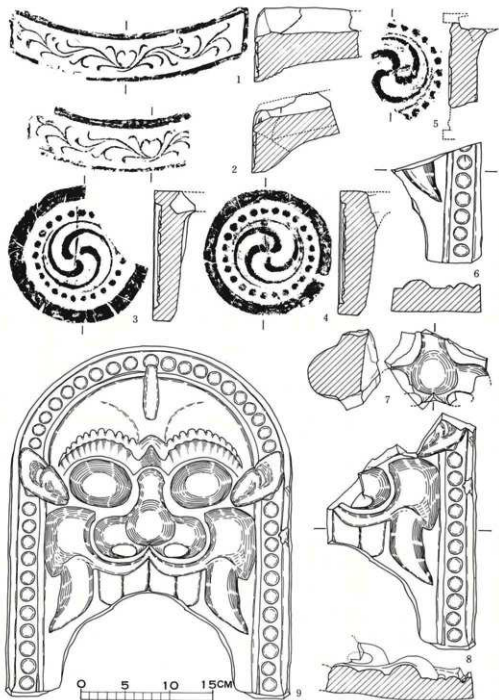
注9 中村直勝「安楽寿院」京都府史蹟勝地調査会報告第6冊 大正14年



第6图 出土遗物实测图(三) 軒九瓦、軒平瓦



第7图 出土遺物実測図(四) 軒平瓦(1、2)、丸瓦(3、4)、平瓦(5)



第8図 出土遺物実測図(五) 軒平、軒丸、鬼瓦類(2、5、7、8)
 および社山古窯出土同范瓦(1、3、4、6)ならびに鬼瓦復元推定図(9)

5 結 語

I 社山古窯と同范の瓦について

以上が吉田2号窯の調査結果であるが、出土遺物の項で述べたように、本窯と東海市社山古窯において同じ范による瓦焼成をおこなっていることからその背景を若干考察してみよう。

軒丸瓦Ⅰ・Ⅲ類、軒平瓦Ⅰ・Ⅱ類、鬼瓦(社山鬼瓦第Ⅰ類)の5種が両者に同范であって、おそらく三巴文軒丸瓦Ⅱ類を含めた6種がセットで両窯で焼成されたものと思われる。

社山古窯では、このほかにも各種多様の瓦類を焼成していて、しかもこの吉田古窯を含めて、周辺の論田古窯、権現山古窯で同一の意匠の瓦を出土している。この点に関して、田中稔、杉崎章氏等は各古窯の他製品の製作技術に相異がみられること、窯構造に相異があることから、別の工人集団であって、瓦製作にあたっては社山工人集団と「分担して特別の需要にこたえた」と考えられている。

しかし、社山古窯出土の山茶碗類^(註1)と他の古窯出土の碗類との差は、一部に明らかに時間的な差が認められ、各古窯間には田中・杉崎氏等の考え方の関係も存続しうる反面、時間的な経過を考慮されねばならない。我々が調査した吉田古窯の場合には、社山古窯との間に次の関係を想定しており、社山工人集団との分担焼成ではないという結論に達している。

まず前述のように凡瓦文様の范型が細部の点で一致していることは、型そのものを両窯でセットとして使用していることを示している。

次に碗類に時間的差が認められることがあげられる。

吉田2号窯の碗・皿類は遺物の項で前述のⅠ・Ⅱ類とも社山古窯でも認められるが、さらに新しい様相をもつ径の15cm前後で胴部の直線的な碗・高台のない器高2cm前後の皿は吉田1・2号窯とも出土していない。さらに本窯製品中にみられる広口壺、短頸壺、長頸瓶把手は初期山茶碗窯にみられる特徴といえる。また、吉田1号窯出土の碗類は、本窯のⅡ類であって、出土例が少数という欠点があるがⅠ類の出土をみない。したがって3古窯の間に吉田2号窯→吉田1号窯→社山古窯の時間的な経過を見出すことができる。

次に古窯構造において、吉田2号窯は通有の山茶碗窯の形態をとりながら分焰棒を使用し、1号窯では分焰孔に間仕切り障壁を設けさらに社山古窯では、山茶碗を伴焼しながら分焰柱をもたない窯構造であるという。この変化もまた次の推論の根拠となりうる。

以上3点を加味し、筆者はすでに吉田1号窯報文^(註2)において推論した工人の移動を推し進め次のように考える。

おそらく吉田2号窯において山茶碗焼成をはじめた工人集団は、ほぼ同時期に京都安楽寿院納入の瓦生産の注文を受け、分焰棒などの工夫をしながら焼成に集中したが、製品の未製

が多く、2号窯を廃棄し、隣接地に、焚き口方位をやや西にふって瓦生産を主体に間仕切り障壁をおいた吉田1号窯を築き焼成した。この窯での製品の搬出がどの程度であったかは不明であるが、ここでも焼成中の崩壊により廃棄しており、その後、瓦の木型をたずさえ社山古窯築窯に移ったと考えられる。社山古窯では、吉田古窯とは逆に丘陵頂近くの北斜面に分焰柱をもたない窯が築かれ、前後8回にわたる改築をしながら多量の瓦生産をおこなっている。

^(11E3) 社山古窯での瓦生産は最初に引続き安楽寿院供給瓦を、吉田古窯での木型そのものを使って焼成し、以後、山茶碗を伴焼しながら、在地寺院への供給瓦をかなりの期間（12世紀中葉から12世紀末あるいは13世紀初頭まで）焼成したようである。

II 瓦供給の歴史的背景

本古窯製品が、京都安楽寿院へ供給された背景には、荘園制下の本所（鳥羽院）と在地熱田社の関係での献納とは別に、複雑な階層関係を背景として受領国司層の介入もその側面に大きくからんでいることを前報文で想定したが、例証として三河国守藤原頭長銘鍬が、伊勢神宮領で焼成されていることをあげた。農村経済の進展と、在地領主層の成長に伴い成立した知多半島初期山茶碗窯における瓦生産の背景には、荘園経済を進展させる院政権力と結びつく受領国司層、あるいは、権門寺社と結びつく在地領主層等の活発な動きがあると思われる、本窯所在地域における在地領主層が、熱田社と結びつく以前に受領国司層の介入あるいは結びつきによって安楽寿院への瓦納入がおこなわれたと考えられるのである。熱田社の権力増大が義朝、頼朝等源氏勢力との結びつきによる歴史的背景から、熱田社領荘園が増大するのはむしろ鎌倉政権以後の12世紀末と考えられ、院政期との若干のずれを感ずるのである。

一方、中世六古窯の一つである備前焼の出発もまたこの時期とみられ、本窯同様の巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦の生産を日常雑器とともに焼成しており、俊乗坊重源が備前国司（1193年）として東大寺再建瓦を焼成させる以前さほど隔たない時期の瓦生産とみられ、本地域等と歴史的背景を同じくするものであろう。^(11E4)

すでに指摘されているように、当地方では、須恵器から灰陶釉の系譜から派生的に東山～瀬戸方面、知多半島域へと築窯場所が拡大するが、知多における初期山茶碗窯である本窯、あるいは東山における同期の窯である東山61号窯^(11E5)には、鳥羽離宮東殿納入の巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦の生産がみられ、権門寺社と結びつこうとする受領国司層あるいは有力な在地領主層が半農半手工業者集団を掌握していることを示している。このことは、同時に地方在地領主層の中世封建制下の荘園経済掌握への移行をも示し、院政期の政治的動揺下に権力者側の意図する政治的な大土木事業を利用して中央の需要に応ずる瓦生産とその納入が東山地域やこの吉田地域において開始されたことは、窯を掌握する在地領主層と受領国司層の結びつき

が考えられ、受領層の院家への納入という形態をとったと考えられる。

また一方、知多半島におけるこの期の瓦生産は、この地域のほか、半田市と常滑市の境に存在する半田池古窯址群にもみられ、京都神仙苑出土の宝相華文軒丸瓦を焼成し、かつまた仁和寺再建瓦をも焼成しているという背景にも当然ながら在地領主層と中央権門寺社との結びつきを示している。^(註7)

さて、社山古窯焼成の他の瓦類については、若干時代の下がるものと考えられ、類似の蓮華文軒丸瓦、同意匠の宝相華文軒平瓦、杏葉唐草文軒平瓦が熱田神宮寺にみられること、杏葉唐草文軒平瓦が東海市観福寺から出土していることは、権力を貯えつつある熱田大宮司(莊園領主)^(註8)の要請という見方に対し社山一帯における在地領主層(=武士階級)の、熱田社と鎌倉の結びつきを見越した自己権力の保護の立場から熱田社領となっていく過程での自らの瓦の献納(12世紀末ないし13世紀初)あるいは在地領主の菩提寺の建立をはかっているものと考えられることもできよう。これは、平安末期の政治的な寺院建立と意図をおなじくする鎌倉幕府初期の東大寺再建等にもみられる背景と同じような歴史的背景を地方にも考えうるからである。

このことは、鎌倉前期(おそらく13世紀前半)を最後に、以後瓦陶兼業窯が、知多および東山から姿を消すことから首肯されよう。

III 瓦当文様の変遷

すでに吉田1号窯の報文の中で巴文軒丸瓦唐草文軒平瓦のセットの変遷を考察したが、最近調査されたものがあるので、再度補筆することとする。

1つは東山101号窯でのセットの出土であり他の1つは、塩狭間古窯の供給先の判明したことである。^(註9)^(註10)

文様および形態変化は、全体に大型から小型へ、文様の形式化、簡素化があげられる。I～III類に分類され、平安末期～鎌倉初期の極めて短期間の変遷ではあるが、次表の如くなる。

	三 巴 文 軒 丸 瓦	唐草文軒平瓦	古 窯 名
I	珠文30個 径16cm 巴文径 9.5cm	面長28cm 巾6cm 二反転均整	東山161号窯
II	" 24個 径15~16cm 巴文径 8.0cm 26	面長27cm 巾5.5cm 三反転やや不均衡	吉田古窯、社山古窯
III	" 20個 径13.5cm巴文径 7.0cm 18	面長17cm 巾4.5cm 形式化した三反転	東山101号窯

前回の報文でⅢ類として瓶瓦3号窯をあげたが、この窯には軒平瓦がなかったため、やや時代の下がるといわれる塩狭間古窯の扉行唐草文をあげたが、今回の東山101号窯の出土例によって、完備されることとなった。一方、塩狭間古窯の瓦は足助八幡宮神宮寺へ供給されたことが明らかになり、おそらくⅢ類と時間的にさほど隔たない時期の焼成の可能性がある。^(注12)

以上、本古窯について、前回の報文を補筆したわけであるが、なお、近年京都近辺で、知多半島製品と思われる瓦類の出土が続いており、なお産地とその歴史的な背景について新事実の明らかになることも多いと思われる。

注1 田中稔「杜山古窯—山坪・山風」『横須賀の遺跡』横須賀町 昭和31年

杉崎章「常滑の窯」学生社 昭和45年

注2 拙著「吉田第一号窯発掘調査報告書」大府町教育委員会 昭和44年

注3 檜崎彰一「杜山古窯—構造論」『横須賀の遺跡』横須賀町 昭和31年

杉崎章ほか「権現山古窯址」横須賀中学校 昭和40年

注4 鎌木義昌「瀬戸内」『日本の考古学VI』歴史時代上 昭和42年

注5 檜崎彰一「古代中世窯業の技術の発展と展開」『日本の考古学VI』歴史時代上 昭和42年

注6 檜崎彰一「東山古窯址群」『愛知県知多古窯址群』愛知県教育委員会 昭和36年

東山61号窯出土の右まわり三巴文軒丸瓦、均整唐草文軒平瓦はともに鳥羽離宮東殿跡(昭和48年出土)に出土しており、吉田古窯出土の左まわり三巴文軒丸瓦、唐草文軒平瓦Ⅱ類もともに鳥羽離宮東殿跡(昭和48年出土)に出土していて、瓦供給の背景に尾張国司(受領国司)の積極的な動きを読みとることができる。

注7 杉崎章「常滑窯業の歴史」『常滑窯業誌』所収 常滑市 昭和49年

注8 杉崎章ほか「権現山古窯址」横須賀中学校 昭和40年

注9 小島一夫ほか「H-101号古窯跡発掘調査報告」名古屋市教育委員会 昭和48年

注10 「塩狭間1号古窯址発掘調査速報」東加茂郡足助町誌編集委員会 昭和43年

注11 「瓶瓦3号窯」東山工業高校創立5周年記念『研究紀要』Vol.1 昭和38年

注12 「塩狭間2・3号古窯址発掘調査速報」東加茂郡足助町誌編集委員会 昭和44年

※なお、本報告および吉田第1号窯発掘調査報告で述べている安楽寿院出土瓦(中村直勝「安楽寿院」京都府史蹟勝地調査会報告第6冊大正14年)は、近年の鳥羽離宮跡の調査によって、鳥羽離宮東殿跡などに出土しており、安楽寿院の建立に伴う瓦とするよりも鳥羽離宮の各建築物に伴う瓦とする方が妥当であるという意見が有力である。

本報告を執筆するにあたり、京都大学文学部考古学修士課程上原真人氏および鳥羽離宮跡調査研究所清野紀子氏には種々ご教示賜った。記して感謝する次第である。



遺跡遠景



調査前灰層露出状況



調査後の全景



古窯前庭部の状況



焚き口部からの全景



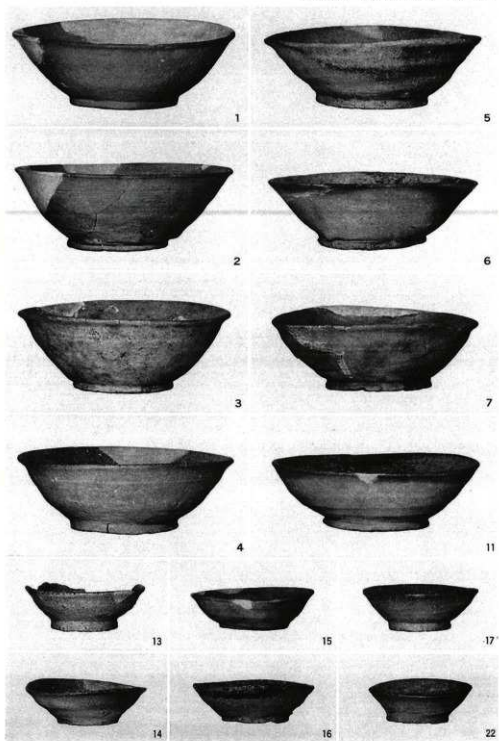
焼成室上部からの全景



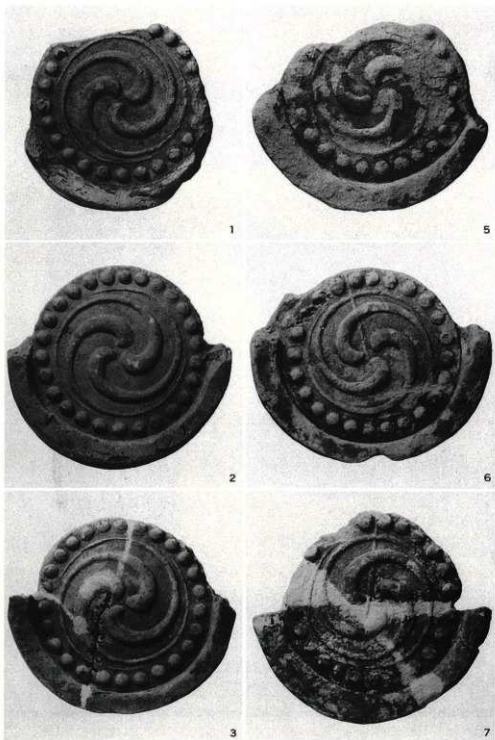
分焰柱および焼成室の窯体状況



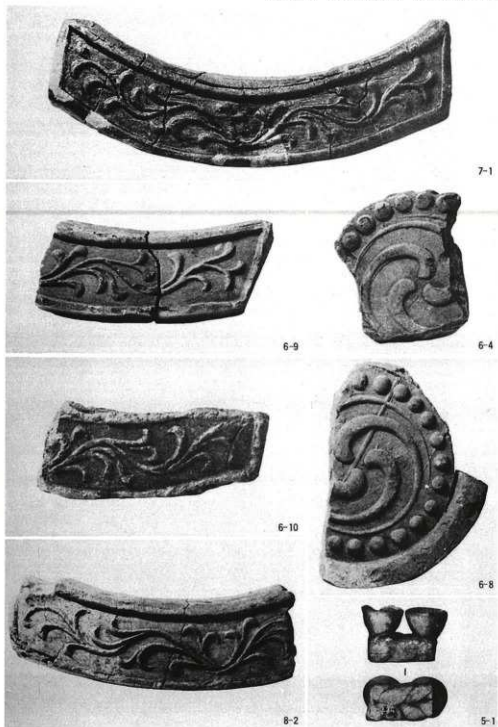
焼成にみられる二次窯壁



番号は第4図と一致

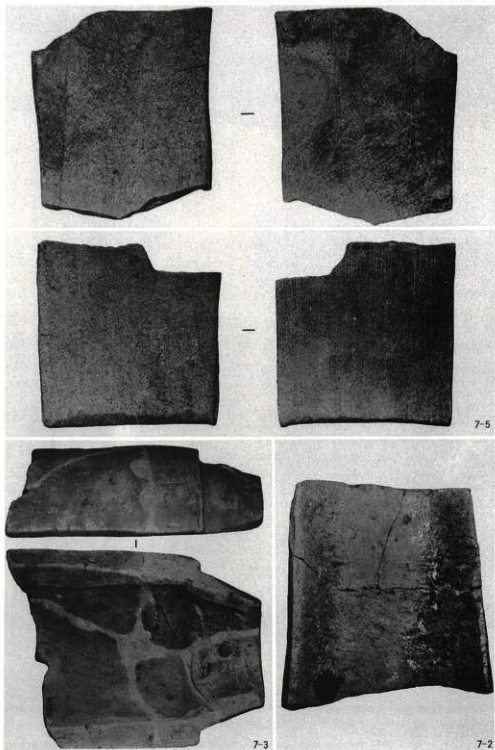


番号は第6図と一致



(番号は挿図番号を示す。例8-2は第8図2)

図版第8 出土遺物(4) 平瓦・丸瓦および軒平瓦(右下)



(番号は挿図番号を示す)



8-1, 3, 6は社山古窯出土品(東海市教育委員会蔵)で、それぞれ下のもの(吉田2号窯出土品)と同范品である。
(番号は押印番号を示す。縮尺不統一)

昭和50年3月20日印刷

昭和50年3月31日発行

吉田第二号窯発掘調査報告書

編 集 行 大 府 市 教 育 委 員 会

印 刷 製 本 有限会社 真 陽 社
京都市下京区油小路綾光寺下ル